

少女マンガ雑誌『りぼん』『なかよし』の調査 ——1990年代における人気作の特徴と傾向——

西原 麻里

1. 少女マンガジャンルと『りぼん』と『なかよし』

本研究は、1990年代の小学生向け少女マンガ雑誌に掲載されたさまざまな作品を対象に、少女マンガの主流な雑誌においてジェンダー規範や異性愛規範がどのように表現されているかを考察するものである。本稿では、そのために実施した日本のアーカイブ施設における雑誌の悉皆調査の結果と、そこから把握できた人気作の特徴と傾向を報告する。

「少女マンガ」というジャンルでは、つねに他者との関係性が描かれてきた（藤本由香里 2009）。まず少女マンガの黎明期にあたる1950年代、中心的メディアは貸本であった。貸本の多くの作品で、母娘もの（主人公の少女と母との関係）や日常のなかでの友情ものなど、身近な人物との関係性が描かれていた。その後1960年代に、マンガ市場の中心が貸本から週刊雑誌へと移り変わる。水野英子や西谷祥子、里中満智子などの若い女性マンガ家が登場し、華やかな絵柄で学園もののラブ・コメディ（ラブコメ）やロマンティック・コメディ（ロマコメ）を描いて人気を博した。この流れのなかで少女マンガに恋愛のモチーフが登場し、「すてきな男の子と結びあうこと」の幸せが描かれるようになる（米沢嘉博 2007 [1980]、158-166）。以降、少女マンガは恋愛（異性愛）を中心とするジャンルとして発展していく。

ただし、つねに恋愛（異性愛）のポジティブな側面ばかりが描かれていたわけではない。1970年代に入ると、少女マンガでは歴史ものや職業もの、SF、ミステリー、さらに少年愛などさまざまなモチーフが登場する。そのうえで、規範から逸脱し自由に生きようしたり、規範を認識しながらも女性としてどのように生きるかを模索したりする主人公たちが登場する。また70年代の『りぼん』（集英社）の作家陣が担い手の「乙女ちっく」と呼ばれたサブジャンルでは、おしゃれなファッションに身を包んだ主人公たちの姿や恋愛感情の繊細な揺れ動きが表現され、大きな人気を博した⁽¹⁾。多様なモチーフを含みこんだ少女マンガは雑誌のタイトルも増え、小学生から中学生、高校生、また大学生や社会人を対象とする雑誌が出版されていった。

こうした少女マンガの文化史・メディア史において、1990年代の出版状況は特徴的なものの一つである。それは、集英社の『りぼん』と講談社の『なかよし』という小学生向けのマンガ雑誌が、少女マンガ史上もっとも発行部数を伸ばしたことにある。『りぼん』と『なかよし』はともに1955年に創刊し（『なかよし』創刊号の発売日は1954年12月）、同じ世代の読者を対象とする雑誌としてライバル関係にあった。『りぼん』は1994年に公称発行部数255万部、『なかよし』も1993年に公称発行部数210万部を記録し、少女マンガの代表的雑誌としてひじょうに多くの読者を獲得していた。

90年代のこの2誌の人気を支えていたのが、当時それぞれに掲載されていたマンガ作品である。しかもこの時期に発表されたいくつかの作品は、2020年代現在でも人気を博している。たとえば『りぼん』は「特別展 りぼん 250万里ぼんっ子大增刊号」という企画展を2019年から開催し、COVID-19の流行による中止がありつつも、日本全国を巡回した。この展覧会では90年代の作品に焦点が当てられ、「ときめきトゥナイト」（池野恋）や「ちびまる子ちゃん」（さくらももこ）などの原画やふろく、また雑誌本体も展示されていた。メインビジュアルは各作品の主人公の少女たちが笑顔で「久しぶり。元気にしてた？」と語りかけるもので、90年代当時にリアルタイムで接していた読者を主要な観客層に想定していることが伺える⁽²⁾。また『なかよし』に掲載されていた「美少女戦士セーラームーン」（武内直子）は、2022年に連載開始30周年を記念して、東京の六本木ミュージアムにて「美少女戦士セーラームーンミュージアム」という企画展を開催した。会期は3期にわけられ、マンガの原画・複製原画のほか、アニメーション作品の関連グッズやミュージカルの衣装など、複数のメディアに渡ったさまざまな展示がおこなわれた。このように90年代の『りぼん』と『なかよし』は、その当時ひじょうに多くの読者を獲得していただけてだけでなく、現在でも継続した人気があると考えられる。

しかし一方で、日本の少女マンガ研究やマンガ文化史・メディア史研究において、この時期の『りぼん』や『なかよし』はあまり研究の俎上に載せられていない。先述の「美少女戦士セーラームーン」など特定の作品や、『りぼん』で活躍した作家について考察した研究成果は出されているが、マンガメディア史のなかで雑誌や作品の傾向と特徴を総体的に捉えた研究は比較的少ない。少女マンガ研究自体は少なくないにもかかわらず、やや上の世代向けの雑誌である『マーガレット』（集英社）や『LaLa』、『花とゆめ』（どちらも白泉社）などの作品のほうが注目されることが多い。「少女マンガ」というカテゴリに含まれる雑誌や作品は実は幅広く、一般社団法人日本雑誌協会の分類にある「少女向けコミック誌」をみると、『別冊マーガレット』（集英社）や『Cheese!』（小学館）など高校生や大学生もターゲットの雑誌も含まれている。女性主人公たちの主体性や繰り広げられる恋愛の様相を考察するうえで、これら比較的上の世代向けの雑誌に掲載される作品のほうが特徴的だからかもしれない。

ただし、『りぼん』や『なかよし』の読者対象の中心は小学生だが、発行部数は他の「少女向けコミック誌」該当雑誌と比較して少なくない。したがってこれらの雑誌も、少女マンガというジャンルにおいてジェンダーや異性愛の表象を考えるために適したメディアだといえる。しかも少女マンガが恋愛（異性愛）をテーマとし、他者との関係性や主人公の生き方を描くジャンルだからこそ、これら小学生向けの雑誌掲載作品における物語のモチーフや言説は、現代日本のポピュラー文化を通じて異性愛規範やジェンダー規範を考察するために重要だと考えられる。

そこで本稿では、1990年代の『りぼん』と『なかよし』における物語の特徴や異性愛規範、ジェンダー規範を考えるためにおこなった、雑誌の悉皆調査の結果を報告する。当時の『りぼん』と『なかよし』における人気作がどのような作品か、調査結果からわかったことをまとめていきたい。

2. 調査の目的と実施概要

本研究の大きなテーマは、1990年代の小学生から中学生向け少女マンガ雑誌『りぼん』『なかよし』を対象に、恋愛（異性愛）やジェンダーがどのように描かれていたかを明らかにすることである⁽³⁾。さまざまな物語をつうじて、恋愛（異性愛）とジェンダーに関する規範的、または逸脱していると考えられる言説がどのように表現されているか、またそれらの言説が読者たちにとってどのように読み取られていたかを考察することが、研究課題の目的である。

そのために本稿では、2022年8月に実施した雑誌の悉皆調査の結果を報告する。『りぼん』と『なかよし』それぞれの雑誌としての特徴を明らかにするために、日本のマンガ関連メディアのアーカイブ施設である京都国際マンガミュージアム（以下「京都MM」と記載）にて調査をおこなった。

京都MMは、国内外のマンガに関連するさまざまな資料を収集・保存・公開しており、現代日本のマンガ関連研究施設を代表するミュージアムである。国内外のマンガ単行本のほか、各ジャンルの雑誌、ふろく、マンガ作品の原画、さらに江戸時代の戯画浮世絵や明治・大正・昭和戦前期の諷刺マンガ雑誌なども含めて、約30万点の資料が収められている⁽⁴⁾。京都MMには研究者が調査分析をおこなうことができる「研究閲覧室」があり、18歳以上で研究・調査目的であったり閉架資料の閲覧を希望したりする者であれば誰でも、閲覧登録をしたうえで利用することができる。

調査は2022年8月の研究閲覧室が利用できた日時点で、合計で2日かけて実施した。調査した資料は、京都MMの所蔵資料検索で見つけることのできた、『りぼん』と『なかよし』の1990年から99年までの出版号である。『りぼん』と『なかよし』には増刊号もあるが、今回は「〇月号」と表記されている月刊の通常号をピックアップした。そこでヒットしたのが、『りぼん』が1990年1月号から1999年7月号までで（途中で抜けた号あり）合計102誌、『なかよし』が1991年11月号から1997年11月までで（途中で抜けた号あり）合計67誌であった。両誌とも1990年代発行号を網羅的に調査することはできなかったが、人気作品などのおおよその傾向をみることはできた。

上記の発行号をもちいた誌面の悉皆調査として、表紙、巻頭カラー（各誌の最初に掲載され、冒頭と扉ページがカラーページ）、センターカラー（各誌の中に掲載され、扉や冒頭ページがカラーページ）、メインのふろくを担当する作品のタイトルとその数を数えた。少女マンガにおけるカラーのページは、物語の美しさや華やかさを視覚的に演出するための重要な役割をもっている。なかでも表紙や巻頭カラーは、そのときの雑誌の「顔」となる作品が担っていると考えられ、各誌の人気傾向を見出すことができる。またセンターカラーは、新連載作品や読み切り作品などその号の特別作品だけでなく、巻頭カラーと同じく読者から継続的に人気を集める作品が該当していると考えられる。ふろくも『りぼん』や『なかよし』などの小学生向け雑誌では読者を獲得するための重要なツールであり、人気作がイラストを担当していることが多いと考えられる（1編デジタル・コミック企画編集部編 2018）。ふろくの名称は、誌面のふろく作成ページや目次ページの記載で確認した。『なかよし』ではふろくの名称に作品名が記載されていることが

ほとんどだが、『りぼん』では作品名ではなく作者名で記載されていたり（たとえば「池野恋のハンディクラフトボックス」『りぼん』90年2月号）、作者名と作品の主人公のキャラクター名が併記されていたりする（たとえば「吉住渉の未央ちゃんビーチバッグ」『りぼん』90年7月号）ことが多かった。前者の場合は各作者がそのときに連載中の作品にカウントし、後者の場合は各主人公が登場する作品にカウントした。

以上の基準により、『りぼん』と『なかよし』各号の調査を実施し、該当作品をピックアップした。なお、号によっては複数の作品のキャラクターが表紙やメインのふろくを担当することがあるが（たとえば「なかよしオールスターズスペシャル卓上カレンダー」『なかよし』93年1月号）、今回はそれらは数に含めなかった。また、メインのふろくが2作品ある場合はどちらもカウントした。

3. 『りぼん』と『なかよし』の調査結果

『りぼん』と『なかよし』の誌面構成はほぼ同じであり、どちらも各号の中にまんべんなくセンターカラー作品が掲載されていた。ただしセンターカラー作品の数は異なり、『りぼん』は毎号おおむね7作品、『なかよし』は毎号おおむね5作品であった。またふろくも1号あたり7点から10点近くあり、ふろくの数の多さが雑誌メディアの重要な要素であることが伺えた。

まず『りぼん』の結果から、合計数が多かった順に上位10作品を表1にまとめる。

表1 『りぼん』1990年1月号から1999年7月号まで（途中の抜けあり）

作品タイトル	作者の名前	表紙	巻頭カラー	センターカラー	メインのふろく	合計
ときめきトゥナイト	池野恋	9	6	39	9	63
ママレード・ボーイ	吉住渉	9	13	26	15	63
姫ちゃんのリボン	水沢めぐみ	9	11	30	11	61
こどものおもちゃ	小花美穂	7	11	30	8	56
天使なんかじゃない	矢沢あい	6	10	28	6	50
ベイビィ☆LOVE	椎名あゆみ	7	6	26	6	45
ハンサムな彼女	吉住渉	7	5	17	12	41
ご近所物語	矢沢あい	5	4	26	6	41
ちびまる子ちゃん	さくらももこ	2	0	36	2	40
赤ずきんチャチャ	彩花みん	3	1	30	1	35

『りぼん』の調査した発行号でもっとも多かった作品の一つが、池野恋の長期連載作品「ときめきトゥナイト」である。本作品は第1部が1982年7月号より連載を開始し、1990年代には第2部・第3部が連載をしていた。物語のメインテーマは恋愛（異性愛）で、第2部は中学生の人間（日本人）の少女と魔界人の少年との恋愛物語、第3部は魔法の力をもつ魔界人の小学生の少女が人間界（日本）で起きるさまざまな問題を解決しながら、少年との恋愛関係を育てていく物語である。この作品と同数であったのが、1992年5月号より連載を開始した「ママレード・ボーイ」（吉住渉）である。こちらも物語のメインテーマは恋愛（異性愛）で、主人公の高校生の少

女と同年の少年との恋愛関係や、家族や友人など身近な人に起きる問題に主人公が立ち向かう物語である。昭和を舞台とするコメディ作品である「ちびまる子ちゃん」と魔法の国でのドタバタ劇を描いた「赤ずきんチャチャ」（彩花みん）を除き、『りぼん』の人気作品のほとんどは恋愛（異性愛）を主のテーマとする作品であった。

また表1にまとめた作品の多くで、少女たちの日常生活が物語のベースとなっていることがわかった。「赤ずきんチャチャ」は魔法の国、「ときめきトゥナイト」や「姫ちゃんのリボン」（水沢めぐみ）は日本と異世界（魔法の国）を行き来する物語、「こどものおもちゃ」（小花美穂）と「ハンサムな彼女」（吉住渉）は芸能界を舞台とする物語だが、いずれも学校生活や、家族・友人との暮らしなどを描く作品である。そのうえで、主人公の少女と少年との恋愛（異性愛）や、少女と友人との友情が描かれる。主人公たちに近い関係のなかで展開する物語がほとんどであることが、『りぼん』人気作の特徴といえる。

こうした恋愛（異性愛）や友愛のプロットを概観すると、かならずしも規範に従順な少女ばかりでないことがわかる。少女たちが自分の意志で行動し、身近な友人や好きな相手である少年のピンチを助けようとする様が頻繁に描かれるからである。また「ご近所物語」（矢沢あい）は、主人公の少女が服飾デザイナーになる夢を叶えようと奮闘する物語で、幼馴染であり恋愛のパートナーでもある少年が、その夢を応援するという関係性である。主人公の少女の行動を少年がサポートする様子は、「姫ちゃんのリボン」など他の作品でもみられる。

ただし、異性愛関係が同性との友愛関係よりも優先的に展開することが、『りぼん』該当作品の多くに共通していた。恋愛それ自体が主題であり、嫉妬やすれ違いといった恋愛にまつわるトラブルが物語のフックとなっていた。また、明るくポジティブで困難に負けない少女と、活発だがクールで冷静、頼りがいのある少年という、ジェンダーにもとづく定型的な関係がほとんどの作品で維持されていた。

次に『なかよし』について、同様に合計数が多かった上位10作品を表2にまとめた。

表2 『なかよし』1991年11月号から1997年11月号まで（途中の抜けあり）

作品タイトル	作者の名前	表紙	巻頭カラー	センターカラー	メインのふろく	合計
美少女戦士セーラームーン	武内直子	19	23	35	23	100
ミラクル☆ガールズ	秋元奈美	7	8	17	10	42
魔法騎士レイアース	CLAMP	7	10	16	6	39
怪盗セイント・テール	立川恵	6	7	17	6	36
ようこそ！ 微笑寮へ	あゆみゆい、 原作：遠藤察男	4	3	21	2	30
くるみと七人のこびとたち	高瀬綾	2	0	22	0	24
カードキャプターさくら	CLAMP	5	4	11	4	24
デリシャス！	あゆみゆい、 原作：小林深雪	1	1	15	2	19
きんぎょ注意報！	猫部ねこ	4	1	12	1	18
超くせになりそう♡	なかの弥生、 原作：吉村杏	1	1	13	0	15

『なかよし』では、「美少女戦士セーラームーン」が合計100回と最多の登場であった。表紙や巻頭カラーなどすべての項目で他の作品よりも倍以上登場しており、1990年代の『なかよし』の看板作品であったことがわかる。

「美少女戦士セーラームーン」は、中学生の少女たちが月や惑星の力を得て「セーラー戦士」に変身し、宇宙から地球を侵略しにやってくるさまざまな敵と戦う物語である。1992年2月号より連載が開始し、以降1997年3月号まで合計5部に渡って展開した。この作品にも少女たちの魔法の力が登場するが、その効果は『りぼん』掲載作品と異なり、敵と物理的にバトルをするために発揮される。主人公たちは戦いなかで血を流し、命の危機に陥ることもある。また、恋愛（異性愛）要素も含まれており、主人公の少女とその運命の相手である少年との異性愛関係や、未来からやってきた彼女たちの子どもが登場する。一方で、少女だけで構成されたセーラー戦士のチーム、つまり同性同士の空間や絆が描かれるところも本作の特徴である。少女たちは女性ジェンダーに属しつつも⁽⁵⁾それぞれの年齢や属性、性格付けに違いがあり、少女同士の強い信頼にもとづく絆を重視している様子が描かれる。

こうした、いわゆる「ガールヒーロー」（須川亜紀子 2013）ものが人気作に共通しているところが、『なかよし』の傾向として確認できた。少女たちが魔法の力や不思議な能力によって仲間や世界を脅かす敵と戦う物語として、「ミラクル☆ガールズ」（秋元奈美）、「魔法騎士レイアース」と「カードキャプターさくら」（いずれも CLAMP）、「怪盗 세인트・テール」（立川恵）が該当する。コメディ要素が強い「くるみと七人のこびとたち」（高瀬綾）も、ファンタジーの世界の問題に主人公の少女が立ち向かう物語である。また「超くせになりそう♡」（なかの弥生、原作：吉村杏）の主人公はアイドルとして芸能界で活躍しながらも、道場の跡取り娘として格闘技を得意とする少女である。これらのように、世界観や敵とされるものの違いはあるものの、『なかよし』の人気作にはなんらかの形で戦いの要素が物語に組み込まれているものが多い。

恋愛（異性愛）が主のテーマである作品には「ようこそ！ 微笑寮へ」（あゆみゆい、原作：遠藤察男）がある。『なかよし』の該当作品のなかでラブストーリーが主題である作品はこの1作のみであった。他は「美少女戦士セーラームーン」のように、恋愛要素と同時にバトルや冒険、少女同士の絆が描かれるものがほとんどであった。恋愛（異性愛）を前提とする少女マンガジャンルであるにもかかわらず、それが前面に出ている作品ばかりではないところが、1990年代の『なかよし』の特徴である。

以上の調査結果から、『りぼん』と『なかよし』ではカラーページ等を担当していた人気作の傾向に、いくつかの違いがあることがわかった。そのもっとも大きな違いが、恋愛（異性愛）が主題であるか否かである。『りぼん』は同級生や上級生の少年との恋愛がメインプロットであり、恋愛が成就しカップルとなるまでにさまざまな出来事が描かれる。またカップルとなってからも、その相手や身近な友人・家族に起こるトラブルを、パートナーのサポートを得ながら解決しようとする。一方で『なかよし』でも、近い関係にある少年との恋愛が描かれるが、それよりも少女たちがより大きな問題を解決しようとするのがメインプロットである作品が多い。しかも、少年たちの力を借りて立ち向かうのではなく、少女同士の強い友情や絆によって力を得て戦う。両誌とも恋愛（異性愛）はベースにあるが、そのうえでどのような物語になるかの違いが明

確にあるといえる。

それと同時に、物語の舞台となる場についても違いがあった。『りぼん』作品の多くで、主人公たちは異世界や魔法の国と行き来をするが、基本的には現代日本に生きている。しかも主な舞台は通っている学校やふだん過ごしている街、家庭などの身近な環境である。つまり、比較的狭い世界のなかで物語が展開するのが『りぼん』作品といえる。反対に『なかよし』作品の多くは、現代日本に生きる主人公であっても異世界へ飛ぶなど、ファンタジー要素の強い舞台が設定されている。そのうえで、主人公たちが世界や人びとの暮らしにとって脅威となる敵と戦い、日常を取り戻すという物語が多い。学校や家族など主人公にとって身近な場もちろん登場するが、より大きな広がりを見せるのが『なかよし』作品の傾向である。

4. 今後の展望

以上の調査結果から、1990年代の『りぼん』と『なかよし』それぞれの人気作の確認と、これらの物語の傾向をつかむことができた。京都MMに所蔵のない号も複数あるため、今後は他の施設の資料をもちいて悉皆調査をおこない、90年代の両誌の情報を明確にしたい。

そのうえで、このあとの研究に向けていくつかの論点を定め、今後の課題とする。一つは、『りぼん』と『なかよし』それぞれの人気作の詳細な内容分析をおこなうことである。今回は物語の舞台やプロットを概観し、おおまかな傾向を知ることができた。しかしより詳細な分析のためには、個々の作品のプロットやキャラクターについての検討が必要である。とくに恋愛（異性愛）とジェンダーの規範については、各作品の内容を丁寧に分析することが求められる。こうした内容分析により、少女マンガというジャンルにおける90年代の特徴を明らかにすることができると考えられる。

また、90年代から2000年代は少女文化、とくに「カワイイ」文化に大きな変化が訪れた時期である。この時期には第三波フェミニズムの動きとともに、少女たちの「カワイイ」感性が積極的に肯定されるようになった。こうした少女文化は、女性たちが主体性を獲得したとみなされている一方で、ネオリベラリズムの観点から批判すべき点もある。しかし、現在にかけて形成されてきた日本のポピュラー文化やグローバルな「カワイイカルチャー」において重要な存在である。90年代の『りぼん』と『なかよし』に描かれた物語が、少女文化史や少女メディア史のなかでどのような位置づけにあったのかを検討することは、現在の女性たちのポピュラー文化における社会的問題を考えるために必要だといえるだろう。

そして、当時『りぼん』と『なかよし』にリアルタイムで接していた読者たちは、現在30代から40代となっている。冒頭で述べたとおり、現在でも支持される作品がある『りぼん』や『なかよし』は、おとなになった読者たちにどのような影響を与えたのだろうか。メディアの受け手としてどのように物語を読解し解釈していたのか、また現在ならどのように読むのかを知り、マンガ文化や女性文化を考察するうえで重要であろう。これらの課題を今後のテーマとして、引き続き研究を進めていきたい。

注

- (1) 評論家の橋本治 (1984) は「乙女チック」について、「普通の女の子が普通の男の子に「そのまんまのキミが一番好きだよ」と、その存在を肯定してもらって安心するマンガ」と評している。
- (2) Hotchkiss 「特別展りぼん—250万りぼんっ子♡大増刊号—／りぼん展実行委員会」(<http://www.hotchkiss.co.jp/works/ribon/>) (最終閲覧日：2023年1月3日)
- (3) 本研究の調査対象には同世代向けの小学館発行の少女マンガ雑誌『ちゃお』も含まれるが、京都国際マンガミュージアムの研究閲覧資料に1990年代発行号がほとんど収蔵されていなかった。別途、他のアーカイブ施設にて調査をおこなう予定である。
- (4) 京都国際マンガミュージアム「研究閲覧室」(<https://kyotomm.jp/research/>) (最終閲覧日：2023年1月3日)
- (5) 身体のジェンダーが明示化されていない両性具有的キャラクターとして、第3期の「デス・バスターズ編」から登場する高校生兼F1レーサーの「天王はるか (セラーウラヌス)」がいる。学生服やレース服のときはパンツ姿で男子として、セラーウラヌスに変身したときはスカート姿で女子として振る舞う。また彼女／彼は、男子姿のときは主人公の「月野うさぎ (セラームーン)」にキスしたり、同じくセラー戦士である「海王みちる (セラーネプチューン)」と親密な関係にあったりする。

文献

- 大塚英志 『『りぼん』のふろくと乙女チックの時代：たそがれ時に見つけたもの』筑摩書房、1995年
- 須川亜紀子 『少女と魔法：ガールヒーローはいかに受容されたのか』NTT出版、2013年
- 杉本章吾 『『りぼん』期の矢沢あい作品における「少女」のクーニング：「天使なんかじゃない」を中心に』『文学研究論集』(30)、筑波大学比較・理論文学会、2012年、pp. 17-32
- 「矢沢あい「ご近所物語」における若年女性のセグメント化と「少女」の再構築」『文藝言語研究. 文藝篇』65、筑波大学文藝・言語学系、2014年、pp. 37-66
- 橋本治 『花咲く乙女たちのキンピラゴボウ 後篇』河出書房新社、1984年
- 藤本由香里 「I マンガの歴史 6 少女マンガ」夏目房之介・竹内オサム編著 『マンガ学入門』ミネルヴァ書房、2009年、pp. 35-41
- 矢内裕子構成 「読者を育て物語の海に送り出す」『AERA』(38)、朝日新聞社、2015年、pp. 42-45
- 米沢嘉博 『戦後少女マンガ史』筑摩書房、2007 [1980] 年
- 1 編デジタル・コミック企画編集部 『りぼんのふろく「カワイイ」のひみつ』集英社、2018年

※本研究は、JSPS 科研費「1990年代の少女マンガにおけるジェンダー・異性愛規範に関する表現と解釈の研究」(研究課題番号：21K02304) の成果の一部である。

(受理日 2023年1月5日)